蘇芳集

たんぽぽ

青山　丈

一本の独活を厨に見る日かな
コンビニで春の寒さを言つてみる
雛の日の過ぎてから買ふ桜餅
啓蟄の顔した人が通りけり
古巣見に連れて行かれた空を見る
降り出して直ぐ止みさうな春の雪
たんぽぽの無くなる辺りまで行きぬ

玉子ボーロ

吉田幸敏

鬼やらふ子のをらざれば声低く
風呂敷をきつちり畳む梅の寺
全天を睨むる三月十日かな
こんなにも三月十一日の蝶
まんさくの花一徹を通し切る
わが言に墜つる椿の真紅
鳥帰る玉子ボーロが缶の隅

春のセーター

小川美知子

夕暮の明かり障子を閉めに行く
戦争を憎むマフラーきつく巻く
早春の風吹いてゐる古墳山
ビルディングの肩の辺りを鳥帰る
しやぼん玉むやみな数となりにけり
湖の光へ消ゆるしやぼん玉
春のセーター袖口を一つ折る

割つて入る

木内憲子

明らかなものを映して冬の水
懐かしきやうな冬日に割つて入る
寒林の粗なるが声のつつぬけに
紅梅に佇ちては耳を敲てる
持ち合へる言葉の数の春立ちぬ
立春の歩幅に足らぬ石を跳ぶ
ついと雨くる雑然と二月かな

さやか

小島みつ如

雨上がりの梅林さやかほのと香も
ブックカバーの絞り染和紙老の春
押し花の花簪よ額入りに
シクラメンいくつも並べ珈琲タイム
ひらひらと誰か呼ばふか遊蝶花
梅苑いま丹沢の裾彩りぬ
散りきたる梅の花弁小さきこと

亀石

清水裕子

児のこゑの野面を走るつくつくし
亀石に日の当りたる茂吉の忌
木洩れ日に蝌蚪の生るる神の池
樹の洞に子雀なるや騒がしき
床下の闇の渦巻く猫の恋
てのひらの椿はつばき色変へず
児とゐれば問はれてばかり日向ぼこ

梅白し

下平直子

かばかりの菜畑大事に豆を打つ
母と思ふ日差が肩に梅白し
立春の光を曳いて鳥翔てり
如月の光の沼に待ち合はす
海しづか春あけぼのの日を湛へ
駈ける子に草萌の野の広くあり
山統ぶる鳶の一声朝霞

椿

冨田正吉

話し出す時も見てゐる椿かな
寒椿耳打ちされてしまふなり
もうと言ふまだまだといふ椿かな
佗助を見つめすぎたる涙かな
問答はわれと椿とまたわれと
雪舞ふや朝の椿はまだ赤う
顔冷えて来るまで椿見てゐたり

何やかや

野路斉子

啓蟄の生け垣に干す何やかや
剪定のやがて手が見え脚が見え
無傷とは手に掬ひたる落椿
風車売る老木の根を借りて
かざぐるま買つて風待つ茹で卵
春満月兎の数の賑やかな
草笛吹くきつと何時かは鳥来ると

梅白し

別府優

梅白し生きる証の足の裏
膝寄せて昔を話す草の餅
目の前の春の金魚の増えてをり
もてなしの御膳の通る義士祭
磨くものみがく天皇誕生日
野遊びの果ての寝転ぶ処かな
遣り残す日数ばかりの春落葉

遠見

前田陶代子

游禽の水脈のしろがね二月来る
指先の傷のうづける薄氷
箒目の途切れしあたり梅白し
紅梅の影白梅へ重なり来
木の花の揺れを遠見に春眠し
紅梅の盛りの冷を持ち帰る
思ふこと多きこのごろ夜の椿

冴返る

松原ふみ子

面構へしかと塩引吊られけり
立春の雪ちらちらと平家村
三たび訪ねて満作のまだ咲かず
冴返るひとりの午後は何もせず
解れはじめて三椏のこがね色
辻説法跡に風立つ松の芯
亀鳴くらむかちちははの彼の世にも

梅ふふむ

峰岸よし子

まばたきに梅いちりんの暮色かな
一汁も一菜も湯葉梅ふふむ
追伸の余寒いたはる一語かな
白魚の夢のごときを買ひ戻り
春の雪身ばなれのよき魚食べて
二月なほ日裏は風の棘すところ
ゆつくりと歩めば水の温みけり

遥けき刻

宮尾直美

寒鯉のうごくともなき動くかな
探梅の道に迷ひて串団子
赤き実のこぼれてゐたる春来つつ
喪帰りの鍵見つからぬ余寒かな
みんなみに海の展けて菜の花忌
雛飾る遥けき刻を飾るなり
水神に供花やそろそろ山桜

一歩二歩

八木下末黒

玄関の追儺の豆を踏んで出る
六年の我らの栞風生忌
風生忌寓居鴨川海青く
どつしりと梅の老木風生忌
遠くより梅に近づく一歩二歩
白梅の満開なれどなほ余力
花笠のうすももいろのしだれ梅